クリスチャン　エッセー　　　　　**藤沢周平の作品**

２０１０年
佐々木正明

神様が天地万物をお造りくださったとき、人間だけは特別に、ご自分の姿に似せてお造りになりました。（創世記 1：26～27）
人間には神様の気高いお姿が移（映）し与えられているのです。その神様に似たお姿は、人間の本性として人間の心の奥深くに、しっかりと刻み込まれています。人間が人間としての自覚を持って生きる限り、この本性が消えてなくなることはありません。使徒パウロはこの神様に似せて造られた人間の本性を、イスラエル人は当然のことながら、旧約聖書という律法を持たないすべての異邦人も、必ず持っている律法として表現しています。たとえ旧約聖書という律法を持たない人々でも、その律法が命じることを行っているとすれば、「自分自身が自分に対する律法なのです」と言い、旧約聖書の律法の命じる事柄が、異邦人の「心に書かれていることを示しています」と語っています。（ローマ 2：12～15）

律法と呼ばれていた旧約聖書は、人間に救い主の必要性と、救い主の到来を教えるものです。その救い主を迎える、用意の整った社会を形成するために、神様の教えが文字で記され、イスラエル人に与えられたものです。律法は救いの準備のために、救い主を指し示す指針として、あるいは使徒パウロの言葉を借りると、キリストを信じる信仰に導くための「養育係」として、与えられたものです。（ガラテヤ 3：24）

それに対して、すべての人間に与えられた文字によらない律法、心に書かれた律法は、人間が人間として生きるために、その指針となり推進力となるために与えられているものです。同じ神様から与えられているものですから、多くの共通性をもちますが、旧約聖書という律法は、キリストを信じる信仰に導くためという「特異性」を持ち、イスラエル民族を通して人類に与えられたため、イスラエル民族の民族性、文化、文明程度、歴史、社会構造などの特殊性に応じた、教えや命令が記されています。ですから、それを現代の私たち日本人にそのまま適用するのは、大きな間違いです。イスラエルという特異性の背後にある、普遍的な教えあるいは命令を探し出し、それを私たちに適用しなければならないのです。

一方、すべての人に与えられている心に記された律法は、素直に自分の本性に向き合えば、おのずと思い浮かんでくるものです。優しい思い、他人の幸せを願う気持ち、平和に睦まじく生きようと望む心、そして見えない神様を礼拝し感謝しようとする気持ちです。これらは

形こそ変われ、すべての民族に共通なのです。

話は変わりますが、藤沢周平という作家がいました。初期の作品は暗く救いのないもので、好きではありませんでしたが、80 年ころからの作品はかなり変わり、心に沁みるものが多くなり、牧師の好きな作家の一人になりました。時代劇作家の彼は下級武士の作品を多く書いていますが、そこに表現されているのは、まさにパウロの言う、心に記された律法です。武士社会という状況に圧倒的に支配されながら、一生懸命に人間として生きようとする人間の姿、人類に共通の本性、神様が与えて下さった神様に似た姿が描かれています。

もちろんこれは、神様に与えられた神様に似に人間の本性などということを、まったく知らない日本の作家が描きだしたものです。しかも日本の江戸時代の武士社会という、限られた状況の中で表現された人間の本性であって、決して普遍的なものではありません。普遍的な人間の本性は、あくまでも特定の社会的状況の中でしか、表現されないからです。表現された時には、必ず、社会的要因、民族や国家、文化や言語、あるいは教育や経済環境などに色付けされているのです。人間の本性はまさに種のようなものであって、これが萌え出る時は、かならず、土壌や気候という環境の中に適応して出てくるのです。

ですから、藤沢周平の描く人間の本性は、日本の武家社会という土壌の中のものであって、その中に生きる人間の本性の適応、良心という形で、武士階級や家やしきたりやその中の理不尽と闘う、無力な人間像として表現されています。この無力な人間が、おのれの良心に抗うことができずに、社会に抗って命を失って行く姿が、日本人の心を打つのです。

藤沢周平の描く良心はあくまでも日本の良心です。中国人が描く中国の良心、あるいはアラブ人が描くアラブの良心、アフリカのコンゴの人が描く良心はそれぞれ異なっていることでしょう。

私たちは日本人クリスチャンとして、自分たちの中にある神様の本性を大切にし、それを現代日本の文化の中で、最大限に表現しながら生きて行きましょう。西欧文化のクリスチャン良心は、ちょっと、横において・・・。